書評・紹介

雲井　昭善　著

『勝鬘経』

高崎直道

勝鬘経という経典は、数ある大乗経典のうちでも、なかなか異色の経典である。その最たる点は、勝鬘夫人という在家の婦人が、佛の加護を得て、自ら法を説き、これを佛に賞讃されて、大力の菩薩と並び称されるという経典の構想にある。この在家の、しかも女性による説法ということは、聖徳太子の『勝鬘経義疏』なども夙に強調している点で、あるいは義疏作成の経典の一つにこの経が選ばれたのも、この点にあるのではなかろうかと思われる。さらにその内容は、法華経をうけて一乗の教えを説くもので、いわば大乗の究極を示すものとして、高い評価をうけている。

このように、太子の義疏の影響も大いにあずかって、我国では、維摩経と並んで、殊に名の知れた経典となっていることとて、勝鬘経には古往今来、数多くの註釈や講義、解説の類いが存在する。今ここに、大谷大学の雲井教授によって、新しい観点に立った講義が上梓されたことは、その伝統に花をそえるものとして、慶賀の至りである。

長く人口に膾炙し、註釈類も多い経典を講釈するというのは、参考書が多いのだから一見容易のようであるが、かえって中々骨の折れるものである。本邦初訳とか、紹介第一号というような研究は、多少の誤解が発見されても大目に見てもらえるが、再訳、再解釈ともなれば、旧本のあやまりの見逃し、継承は許されず、どんなに正確でも解説がマンネリズムに陥っては読者に退屈を与える。そこに何とか独自の解釈なり、解説上の新機軸なりが要求される。著者の苦心の存するところである。雲井教授は人も知るパーリ語、原始佛教の権威で、そこにわれわれは、在来の勝鬘経研究者とはちがった新鮮な目を期待するわけであるが、果して、此の度の新著にも、その面からの貢献が随処に見られる。

著者は序文で、「原始佛教聖典をかなり自由にとり入れ」て、「阿含経典と大乗佛教思想のかかわり合い、もしくは佛教思想の発展のあとづけ」をあきらかにしようと試みたと述べているが、これは正に、在来の類書において、皆無とは言わぬまでも、極めてふれることの少なかった点であり、したがって本書のもつ第一の特色であると共に、学会に対する最大の貢献ともなっている。

大乗経典というものは、その中でしばしば声聞・羅漢をけなして菩薩を讃え、二乗を貶しめて大乗を挙吹するため、阿含の教義など全くかえりみられていないごとくに思われがちであるが、実は阿含経典とのむすびつきは予想外に大きい。というより、阿含の伝統的教義の新しい解釈によって、真の佛説を明

らかにすることを使命としたのであるから、阿含の経文は隠れた形で随処にちりばめられている。勝鬘経の場合も、主人公勝鬘夫人の素材となったと思われるマッリカー、つまり、経典では勝鬘の母とされる波斯匿王妃末利夫人（時に勝鬘夫人と訳されている）をはじめとし、羅漢についての「我生已尽、梵行已立、所作已弁、不受後有」の句にせよ、四聖諦、自性清浄心、佛の真子等の語にせよ、原始佛教の教義の継承とそれに対する大乗的解釈が数多く見られる。それらは今まで既に指摘されたものもあるが、本書ではそれと並んで、例えば「正法」についてアショーカ王碑文の用例から説きおこすなど、読者に佛教の伝統を知らせる上で極めて適切な解説が多く見られる。現評者は従来の研究領域からいうと、むしろ勝鬘経を専門とするともいえるのであるが、原始佛教とのつながりという点で、本書から新たな資料をいくつか教えられたことを感謝するものである。

本書の特色として第二に気付くのは、現代に積極的にかかわる態度が一貫していることである。いうまでもなく、それは現代におもねるのではなく、勝鬘経の基本精神に照らしてこれを批判するものであるが、その背後に著者の体験がにじみこんでいることが、批判を実のあるものとしている。少し大げさになるかも知れないが、著者の体験から生れた情熱が本書を書かしめた原動力といった感がある。「不請の友」なる言葉を愛好すると著者は言うが、若干でも著者を知る人ならば、この言葉を大いに首肯することであろう。

○　○　○

印象論が長くなったが、一応、書評の型に従って内容を紹介しておくと、本書は第一篇序論と、第二篇本文解説とより成り、巻末に参考文献解説と詳細な索引が附せられている。これは本書の属するシリーズ、『佛典講座』の共通の形式にのっとるもので、更にいえば、所釈の佛典というのは『大正大蔵経』所載の漢訳テキストを原本とするのが原則となっている。勝鬘経には漢訳二種あるが、本書で用いられたのは求那跋陀羅訳『勝鬘師子吼一乗大方便方広経』で、いうまでもなく太子の義疏の所釈の経典と同本である。

第一篇序論では、勝鬘経のテキスト、その歴史的地位等を解説した後、本書の解読の立場として、大正大蔵経本も記載するところの高麗版に基づく分章に従って経の内容を紹介し、併せて太子の分章との対照表を掲げ、その後、教理上の特色として、経典の女性観と、如来蔵一乗の思想を略説している。

第二篇は右の分章にしたがって正宗分を十五章に分け、各章をさらに数段に分けて各段の解説ごとにタイトルがつけてある。それらのタイトルを追って目次を一覧すれば、さらに内容がよくわかる。はじめの「子を思う親心」以下「まことの心は帰依の心」とか「如来のふところに抱かれて」等々、読者をさそいこむ巧みなタイトルが散見して印象を和らげている。

本文解説は大たい経文の長さに応じて長短があるが、どちらかと云うと、摂受正法章や一乗章までに詳しく、後半はやや簡略である。これは経の強調するところが那辺にあるかを考えれば、つまり、経の立場という点からすると、正法＝大乗＝佛乗

＝一乗の教えを身につける（摂受正法）という誓いが、大乗の実践の基本とされるのであるから、当然の配分で、正法＝一乗の強調はいくら説いても説き足りないことはない。それに対し、後半は、この一乗の内容、もしくは一乗であることの論拠として、如来蔵・法身の思想が展開される。勝鬘経における如来蔵説は、その思想にとって特に大きな発展を示したものとして極めて重要なものであり、教理上かなり難解な点も含んでいる。著者の如来蔵思想解釈は、「佛と衆生の間に横たわる深淵」が「如来の誓願、大悲の光被にあずかるとき、心性本浄の如来蔵・佛性が開発される」とし（二二三頁）、あるいは、「われわれが如来蔵を自覚するというよりも、如来蔵によって人間が生かされ、存在しているということの方が、より自然であろう」（二三九頁）、また、「如来蔵と煩悩との関係は、実は闇の世界に在りながら、人間は本質的に光によって輝かされ、照らされる存在であることを示している。この闇を強く意識し、自覚するとき、光は一層の輝きを増すであろう」（二六七頁）、等々の箇所に、透徹した理解を示していて、それが一乗の内容にふさわしいものであることを解らせてくれる。しかし、欲をいえば、語句の解説の足りないところもあって、難解さが残っていると思われる。

○　○　○

このように、経の立場の解説といい、経の思想内容の説明といい、全体のバランスの上でも極めて善くまとまった解説を施してあって敬服に値するのであるが、細部にわたっては、本書にも全く問題がないわけではない。ただし、その大半は、本書が漢訳勝鬘経に対する講釈であるという、『佛典講座』の性格上已むをえないものである。つまり、求那跋陀羅訳自体が、その原典たる梵本に対してもっていると推定される問題点に由来するものである。もし在来通りの伝統的な方法ということであれば、漢訳の読み下しだけでよろしかろうが、著者のように、また、現評者のように、インド佛教の研究に従事する者にとっては、この解説は漢訳佛典によって述べたまでですと放置しておくわけにはいかない問題がある。実は評者自身、同じ『佛典講座』の中で、勝鬘経と同じ訳者の訳した『楞伽経』（四巻楞伽）を担当していて、同様の問題について、如何なる立場からこれを処理すべきかに悩んでいる。具体的に言うと、インド産の佛典という立場から漢訳佛典を読むとき、どのように読み下すべきかということで、中国文として素直によむと、つまり、伝統的な返り点を用いた読み方に従うと、現存する、もしくは推定される梵文原典の読みに抵触する場合、どう処置するかの問題である。

勝鬘経の難解箇所の大部分は、このようなところにあるのだが、その一例として、如来蔵の空・不空を説く箇所について、かって評者は別のところで紹介したこともある（岩波本、日本思想体系『聖徳太子集』についての予告的紹介文。同体系本『空海』月報、昭50・2）。それに照らして、本書の「不空」の説明をみると、著者は「如来蔵の智慧は、一切法を具えて、煩悩と不離、不脱、不異の不思議の佛法であると〔経は〕述べる

のである」と説明している（二四一頁）が、ここは、如来蔵が、（法身と）不離・不脱・不異なる不思議の佛法を具えていることを述べているのである。これは『宝性論』における引用から見て考えられる解釈なのであるが、しかし、求那跋陀羅の漢訳からかく読むのは至難のわざである。したがって、漢訳は旧来の伝統に従って読み下すとしても、少くとも註記において、かかる異同のあることに簡単にでも触れておいて頂きたかったと愚考するものである。

その他、「阿羅漢は一切において無行」（一五〇頁、一五二頁）という箇所も、『宝性論』所引の文によると、無の字は衍字で、行とは諸行無常の行、つまり有為の諸法というにひとしく、したがって、「於一切行」とは、すべての有為法の中にあっての意なのである。しかし、何故ここに「無」の字が入りこんだかはわからない。漢訳の成立という点からみれば、そこまで考慮する必要があるが、インド的立場からすれば、衍字という他はないのである。こうした問題は数え上げるときりなくあって、もしそれにかかずらわると、一般向の解説書としての本書のバランスを崩すおそれがある。しかし、問題のあることだけは指摘しておきたいところである。

漢訳佛典との関係を離れては、本書には問題は少ないのであるが、一つだけ取上げると、序章で、「佛に値う」ことに関連して、「涅槃に入りたもうた如来・佛に対して、もう一度姿を現わしてほしいと願う」とあるのは、大乗経典の作者、大乗の信者にとっては歴史的事実にちがいないが、勝鬘経の構成からいうと、「爾時佛住舎衛国祇樹給孤独園」で、明らかに佛在世中の事とされているので、若干誤解を招く説明と思われる。

（『佛典講座10』大蔵出版・昭和五十一年四月、
四六版、三三四頁、二〇〇〇円）